

児童委員、教育委員等として随所に功績を収めていよくその声誉を高む。人と為り温良恭謙、諸人その人格を称せざるなし。惜いかな昨年微恙を感じ、旧冬泊然として遷化せらる。世寿七十有一。寔に痛惜に堪えざるなり。

乃ち本日、学園葬の礼を以て本葬儀を修するに方り、宗門の名を以て一炷の香を供へ、謹んで弔意を表す。冀くは上人之を享けよ。

昭和四十三年三月三日学園葬の砌り。

松木本興先生を偲ぶ

立正大学長 坂 本 日 深

松木先生と私との出会いは、昭和十六年、祖山学院が身延山専門学校に昇格して、仏教概論を講ずるために、招かれて登山した時から始まったように思う。

初代校長は身延山法主望月日謙猊下であり、現在の日蓮宗総長片山日幹猊下は、その時教頭職におられた。当時の外来講師の筆頭は京都大学教授本田義英博士で、玉屋旅館に陣取って、そこから講義のため毎日登って来られた。博士は仲々の左利きで、朝から一杯機嫌で滔々と名講義をぶたれた。学生全員出席したことは勿論であるが、先生達も講筵に侍べることを許されたので、私も聴講の恩恵にあづかった。その際、たまたま妙法蓮華経の解釈がなされ「妙

とは灘の生一本をきゅっと飲みほす時の気持だ」と申されたことが、今もなお記憶に残っている。

本田博士はその後、ご出講にならなかつたようであるが、私は、専門学校から短期大学に移り変つても休むことなく、今日もなお毎年出講し続けている。それはお祖師さまのみ霊の棲まわれるこのお山に惹かれたことは勿論であるが、又、学園そのものの雰囲気が無性に楽しいからである。

当時、毎週通勤される先生方は、出講の日、厚徳寮に宿泊されていたが、その中に天台学の大家松木先生、倫理学の望月先生及び、専門は何であつたか忘れたが、ブドー酒をよく持参して来られた福島先生などがおられた。私の宿坊は厚徳寮の近くの端場坊であつたので、授業が終つた後によく厚徳寮に遊びに行き、時々宿泊したこともあつた。それは戦争が苛烈になつて物資も次第に窮乏になつたことも一つの理由である。松木先生の部屋の隣が食堂であつたので、諸先生方と開戸裏を開んで、些やかな酒宴を催しながら夜の更けるまで色々談論することが愉しかった。猪肉をご馳走になつたのもその時が初めてであつた。驚いたことには、松木先生が何時間お酒を召しあがつても、決して姿勢を崩されなかつたことである。爾来、先生がご遷化になるまで、二十六年の長きに亘つて学問的なことは勿論、ともに日蓮宗布教研修所の委員として、或は教学審議会委員として、種々ご指導にあづかつた。ご子息普興君を東洋大学に預かつたのも、このような因縁があつたからである。

松木先生は天台学者であるばかりでなく、又、優れた弁論家でもあつたので、法主親下随行の布教師として日円上人にお伴して屢々全国を巡廻されたと承っている。そして、日円上人ご遷化の際、日円上人の弟子分として色々ご尽力下さつたことは、上人の末弟の一人として感謝に堪えないところである。

最後に特筆しておかねばならないことは、先生が学問に深い理解を持つておられたことである。開宗七百年の記念

事業である「昭和定本日蓮聖人遺文四卷」の刊行が終ったとき、日蓮上人の「註法華経」の徹底的研究をしなければならぬと考え、その外護者のことについて相談した所、そのような有意義な仕事なら、信仰の極めて厚い、身延山大本願の豊田儀三郎氏にお願いしてみようかと約束され、早速日円上人の弟子の一人、井田貞秀師を介して豊田氏に援助方を依頼して下さった。それは昭和三十三年六月のことであつた。幸い、豊田氏のご好意により執行教授、兜木教授と共に研究に着手することが出来た。しかし、その途上、研究の大きな壁にぶつかったので、ご援助の一時中止をお願いしなければならなくなつて、現在に至つてゐる。それは「註経」に引用されている引用文の出典の主なるものは、一往突きとめることが出来たけれども、大藏経を照合してみると、大藏経文と僅かばかり異なる所がありむしろ「恵心僧都全集」中に引用されている経文と一致する所が見られるので、聖人の引用文は、あるいは孫引きではなからうかという疑問が起り、聖人当時の古写本を探索する必要を生じ、更に註釈が法華経の裏面に書かれてゐるので、その註釈が経文の何処に附せられるべきものであるかが、容易に推定出来ないからである。古写本についてはその後、東大寺図書館の中に、聖人より少し前の出世である宗性が、叡山のものを書き写した写本のあることが判明した。又、私が岩波文庫で法華経の和訳を始めたのは、法華経を理解せんがための準備でもあつた。更に立正大学に「法華経文化研究所」を設けたのも、その目的の一つは「註法華経」を徹底的に研究せんがためでもある。幸いにして今回東大寺図書館の古写本や、更に叡山文庫の古写本数百千巻を蒐集することが出来たので、やがて「註経」の研究成果を出版して松本先生の靈前に報告し、多年のお約束を果し、且つご好誼に報いたいと念願する次第である。